九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

おくの風流 ： 芭蕉発句叢考

深沢，眞二

https://doi.org/10.15017/4742066

出版情報：雅俗. 17, pp.2-16, 2018-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

◉論考

おくの風流

―芭蕉発句叢考―

深沢　眞二

はじめに

風流の初やおくの田植うた

（『おくのほそ道』。引用は曽良本による。以下同）

右の芭蕉の発句をめぐっては、「風流」とは何か、「初」はどういう意味か、そしてその「田植うた」は都ぶりだったか鄙ぶりだったか、といった点で論議があり、確説が得られていないと言っていい。

浅野建二氏は「芭蕉と田植歌」(1)において、「風流」についての諸説を、

（A）風流を特殊の謡物の名と解する説

（B）一句を時間的に解して、奥の田植歌は風流の最も原始的なものだとする説

（C）空間的に解して、奥に入って最初の風流は田植歌であったという意に解する説

に三分類している。その上で、

右三説の中、（C）説が現在最も穏当な説とされるが、中には露伴翁の如く、「端的に奥の田植歌の素朴にして古風なるに感じて此句あり」とか「此の初めはわが風流の初めではなくして、風流の初めである。田植歌を賞美したのだ」として、（A）乃至（B）説に近い解を採る人も少くないので、私は少しく異なった角度から（C）説を支持する理由を述べて見たいと思う。

として、広島県の「安芸の囃し田」の古風なるに比べて、東北地方一般とくに白河附近に伝わる田植歌には近世調の詞型が多いことを示し、

ただ察するに田植草紙系統の田植歌に耳なれた？芭蕉が、初めて接する、すこぶるテンポの緩やかな奥の田植歌に、一種の診（ママ）しさと詩興を動かしたのに相違ない。つまり芭蕉は、東北なまりの悠長な歌いぶりに上方では経験し得ない異質的なものを感じたのであって、決して風流の濫觴として、奥の田植歌の古風さを賞美したのではなかろうと思う。

と述べている。「おくの田植うた」は古風ではないが、芭蕉はその鄙びた悠長な歌いぶりに初めて出会い、「風流」を認めたという理解である。

その後、横山邦治氏は「芭蕉の〝風流の〟の再攷――〝おくの田植うた〟は鄙ぶりか――」(2)において、「佐瀬与次右衛門が元禄二年頃から宝永初年の約十五年間にわたって著した」『会津歌農書』の記事を引き、「須賀川地方は、幕初には会津藩の支配下にあったので、田植行事などという習俗は共通したものがあったはずで、『会津歌農書』の記述は参考になるであろう」として、須賀川で芭蕉らが見聞した田植行事

は「鄙には稀なほどに賑賑しく行われた」「村落全体の祝い事」であったと判断している。その上で、

〝おく〟というのは奥羽地方を指す語、そういう土地で見聞した華麗な〝田植うた〟は、鄙ぶりの田植唄というのではなくて、都ぶりの田植唄ではなかったであろうか。〝おく〟で見出した都ぶりの田植唄なのである。そう解することで初めて〝風流〟の語が生きてくるように思えるのである。その〝風流〟は、鄙ぶりの風流ではなくて、日本の文学伝統の上からは正統的用法としての〝風流〟としてである。

と述べている。そして「風流」の語を検証して「古典的みやびの流れを継承する都ぶりの風流」が正統的であることを論じている。

この横山氏の説に対しては、これまでに、堀切実氏によって否定的な見解が示されている。『おくのほそ道 永遠の文学空間』(3) から引けば、

わたしはやはり、この風流はひなぶりの風流であったほうがよいと思います。江戸時代以前は文化というものは、すべて京都中心でありました。（中略）しかし、江戸時代には、少しずつそうした都一辺倒の視点が変わってきているのではないでしょうか。それは街道の発達によって、中央と地方の往き来がひんぱんになったこととも関係があると思います。文化の中心が、東の江戸へしだいに移ってくることともかかわりがあるでしょう。そして、芭蕉は、どちらかというと、都会よりは田舎の気分を好んでいたのであり、地方の土着の文化に対しても心から愛着を寄せていたのでした。芭蕉の俳諧の世界での題材は、決して都会風の洗練されたものではありません。芭蕉の〝美〟の判断の物差しは、けっして〝都ぶり〟を基準としてはいなかったと思います。芭蕉はこのあと、「塩竈の浦」でも、鄙びた奥浄瑠璃（おくじょうるり）に心をうたれているのであります。

とのことである。

思うに、「田植うたは都ぶりか鄙ぶりか」という問題と「風流の初」の語の意味の問題は、関係してはいるが別個の問題であって、二つが一度に論じられているために従来の議論はかみあっていないようだ。そこで、本稿では、第一章で芭蕉発句の語「風流の初」の意味を陸奥を行く芭蕉に即して問い、第二章では田植歌に関する資料を検討して、芭蕉が「おくの田植うた」の何をどう感じたかの読み解きを試みる。

また、諸注の多くは、元禄二年四月二十二日に須賀川へ到着した芭蕉が等躬・曽良との三吟歌仙を巻いた際の発句と、旅の四年ほど後に『おくのほそ道』を執筆した際に須賀川のくだりに載せた発句とを、同一のものとして解釈している。同じ句形であっても文脈が異なれば表現意図も異なるという視点がありうるのではないか。第三章では、作者芭蕉が一つの発句について時間を経てから表現意図を更新した事例として、「風流の」句の解釈を試みる。

一

まずは、芭蕉と曽良の白河の関通過の体験と、「風流の」句が詠まれた状況を確認しよう。

元禄二年四月二十日辰の下刻、芭蕉と曽良は那須の湯本の宿を出、やがて芦野の木戸の外で「遊行柳」ほかの古跡を見物しているが、そ

こで詠んだ句を曽良は記録していない。芦野からいよいよ白河の関をめざして進み、

一関明神、関東ノ方ニ一社、奥州ノ方ニ一社、間廿間計有。両方ノ門前ニ茶や有。小坂也。これより白坂へ十町程有。古関を尋て白坂ノ町ノ入口より右へ切レテ籏宿へ行。廿日之晩泊ル。

一廿一日　霧雨降、辰上尅止。宿ヲ出ル。町より西ノ方ニ住吉玉嶋ヲ一所ニ祝奉宮有。古ノ関ノ明神故ニ二所ノ関ノ名有ノ由。宿ノ主申ニ依テ参詣。　『曽良旅日記』の〈元禄二年日記〉(4)

すなわち国境に二社ある関の明神（新関）を通り過ぎ、遠回りして「古関」をも訪ね、その日は籏宿に泊まった。翌二十一日には「住吉玉嶋」の社を「古ノ関ノ明神」かもしれないと考えて参詣した。その上で、芭蕉は発句を詠んだ。

みちのくの名所〳〵こゝろにおもひこめて、先せき屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝり、いまの白河もこえぬ。

早苗にも我色黒き日数哉　　翁　　『曽良旅日記』の〈俳諧書留〉

だがこの発句はまもなく改作された。

白河関

西か東か先早苗にも風の音　　翁

我色黒きと句をかく被直候。

白河　何云へ

関守の宿をくいなにとをふもの　　翁　　〈俳諧書留〉

この〈俳諧書留〉の記事は、白河に住む俳人・何云へ芭蕉が須賀川から出した書簡の要点を曽良が写し取ったものらしい(5)。曽良にも白河の関の句があった。

しら河

誰人とやらん、衣冠をたゞしてこの関をこえ玉ふと云事、清輔が袋草紙にみえたり。上古の風雅誠にありがたく覚へ侍て　曽良

卯花をかざしに関のはれぎ哉　　〈俳諧書留〉

さて、四月二十一日は、白河の市中を通過し四里先の矢吹の宿まで進んで泊まった。そして二十一日の旅日記のあとには、

○白河ノ古関ノ跡、籏ノ宿ノ下里程下野ノ方追分ト云所ニ関ノ明神有由。相楽乍憚ノ傳也。是ヨリ丸ノ分同ジ。〈元禄二年日記〉

とあり(6)、続く「○忘ズ山ハ」「○二方ノ山」「○うたゝねの森」「○宗祇もどし橋」と合わせて五項目の名所案内が記されている。「相楽乍憚」は「相楽乍単」の書き誤りで、須賀川の相楽氏乍単斎等躬のこと。そしてその後に、

一二十二日須か川乍単斎宿、俳有。

二十三日同所滞留。晩方へ可伸ニ遊。帰ニ寺々八幡ヲ拝。

〈元禄二年日記〉

という記事が来る。つまり曽良は、須賀川の等躬の宿に到着して、街道沿いの名所五箇所についての情報を等躬から得、まず記録した。それから、一つ書きの状況から推測するに四月二十三日の夜に前日と合わせて二日分の日記を付けたと見られる。

二十二日の俳席に臨むにあたり、曽良は、

蠶する姿に残る古代哉　　曽良　　〈俳諧書留〉

の発句を用意したらしいが会の発句としては用いられなかった(7)。当日の俳諧は、

奥州岩瀬郡之内須か川相楽伊左衛門ニテ

下風流の初やおくの田植哥　　翁

覆盆子を折て我まうけ草　　等躬

水せきて昼寝の石やなをすらん　　曽良

（以下挙句まで省略）

天元禄二年卯月二十三日　　〈俳諧書留〉

の三吟歌仙であった。日記には二十二日にのみ「俳有」とあるが、満尾の日付からすると興行は二十三日までかかったのだろう。発句の右上に「下」の字があるのは、次の丁に、

岩瀬の郡すか川の驛に至れば、乍単斎等躬子を尋て、かの陽関を出て故人に逢なるべし

上発句前に有。　　〈俳諧書留〉

とある「上」の字に対応している。芭蕉が歌仙の清書のためにあらためて書いた前書を曽良が写し取り、発句の位置を「下」「上」で指示しているのである。また、「元禄二年」の右上の「天」字は、同じ丁の末尾の、

地この日や田植の日也と、めなれぬことぶきなど有て、まうけせられけるに

旅衣早苗に包食乞ん　　曽良　　〈俳諧書留〉

とある「地」の字に対応している。芭蕉が「田植哥」の句を詠んだのにならい、曽良も二十三日に「早苗」を題材として新たな一句を詠んだのである。

須賀川滞在中の二人の行動の記録は、

一二十四日、主ノ田植。昼過より可伸庵にて會有。會席そば切。祐碩賞之。雷雨、暮方止。

一二十五日、主物忌、別火。二十六日小雨ス。〈元禄二年日記〉

と続く。等躬の家の田植行事が何日から始まったのかは明確でないが、四月二十三日には「めなれぬことぶき」（珍しい田植祝い）や「まうけ」（饗応）があり、二十四日が本番の田植の日だったようだ。芭蕉らは二十四日は昼前に田植を見物したのであろう。昼過からは前夜訪ねた可伸の庵で俳諧が催された。なお、「祐碩」は吉田等雲という医者で、可伸庵の俳席にも一座している。二十五日は等躬の家の物忌で、「別火」は神事に際して穢れを避けるために煮炊きの火とは別に火を切り出すこと。二十六日と合わせて一行書きにしているから二日分を二十六日夜になって簡単に記したものらしい(8)。

ここまで、白河の関通過と須賀川等躬宅逗留の状況を見てきたが、そのあとの旅中で曽良は、芭蕉が（新庄の俳人「風流」の名を除いて）「風流」の語をもう一回用いたことを記録している。須賀川を発ったのは二十九日でその日は郡山泊、翌五月一日は福島泊、そして五月二日に「モジズリ石」を見た芭蕉は、

しのぶの郡しのぶ摺の石は茅の下に埋れ果て、いまは其わざもなかりければ、風流のむかしにおとろふる事ほいなくて、加右衛門加之ニ遺ス

五月乙女にしかた望んしのぶ摺　　翁　　〈俳諧書留〉

と詠んだ。ただし、「加右衛門加之」は仙台で五月五日に会う人物であるから、五月二日すぐに詠まれたとも限らず、五日までに成ったとすべきだろう。右の前書と発句は次のように理解することができよう。

『古今和歌集』巻十四・恋四の、河原左大臣、

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆへにみだれむと思我ならなくに

によって知られた歌枕、信夫郡の文字摺り石は、芭蕉が訪れた時、「茅の下に埋れ果て」いた。石の表を用いて文字摺りの文様を染め出す「しのぶ摺」の習わしも絶え、「風流のむかしにおとろふる事」を残念に思って発句を詠んだ。折からの田植えの季節、「五月乙女」に古き文字摺りの手わざを見せよと望みたい、と。この場合の「風流」とは、文字摺り石でしのぶ摺りをするという、古くゆかしき習俗を大切にする心を指していると考えられる。

右の「風流」の解釈については、「早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺」の句形での、複数の芭蕉真蹟懐紙が参考になる。『芭蕉全図譜』に六点が掲載されているが、それらの前書から〈俳諧書留〉の「いまは其わざもなかりければ、風流のむかしにおとろふる事ほいなくて」に該当する文言を抜き出すと、177番に「いまはさるわざする事なかりけりとなん申を」、179番に「いまはさるわざする事もたえたり。風雅のむかしにをとろふるなん。いと本意なしや」、180番に「いまはさるわざする事もなかりけるとなむ。風雅のむかしに替れるをかなしびて」、181番に「誠風流のむかしにおとり侍るぞ、いとほひなく覚侍る」となっている。178番と参考2の小点には対応する文言がない。また、同じ発句は金沢の北枝が元禄四年に刊行した『卯辰集』にも前書を伴って載るが、同じ箇所は「今はさるわざする事もなく、風雅の昔にかはれるをなげきて」である。これらによれば、「風流」は「風雅」に置き換えも可能であったようだ。「さるわざ（しのぶ摺）する事」を大事にする心が「風流」ないしは「風雅」だったと解してよいだろう。ちなみに、181番の異文からは、「むかしにおとろふる」とは「昔に比べて衰えた」意であって「昔の時点で衰えた」意ではなかったという判断もできる。

振り返って、「風流の初やおくの田植哥」の「風流」もまた、伝統的な習俗を尊重する心の意味で理解するのがよいのではないか。「風流」を名詞として用いていること、それに、「の初や」「のむかしにおとろふる事」と、歴史意識を持つ語に続いていることが共通している。

そして「初や」は、そのような心が保たれてきた長い時間を感じ取って賞賛した、等躬に対してのやや大げさな挨拶の語だったと思われる。犬追物の跡や殺生石を見てきたばかりの芭蕉には、謡曲「殺生石」の結び近くの詞章「これ犬追物の始めとかや」の「始め…や」への意識があったかもしれない。等躬への挨拶句と見る限りにおいては、「私がこの旅で奥州に入って初めて出会った」という「初」と解しては、挨拶の心が弱い。それは芭蕉の側の個人的事情に過ぎない。同じ機会に曽良が詠んだ「蠶する姿に残る古代哉」と同様、古き習俗を今に至るまで大事に守り続けていることを讃えた発句と解してこそ、挨拶句となろう。

付け加えれば、須賀川に滞在していた芭蕉は四月二十六日杉風に宛てて長文の手紙を書くが、中に「朔日二日之比、仙台へ付可申候。三千風、仙台へ帰、むさとしたるあれ俳諧はやり申候沙汰、有之候。仙台之風流、望絶申候。」というくだりがある（『新編芭蕉大成』〈三省堂、一九九九〉書簡編四三番）。ここに見える「風流」は直前に出た「俳諧」の言い換えであろう。つまり、同じ旅の同じ時期に、江戸の杉風に対してはより一般的な意味での「風流」を用いていた。だが一方で、奥州に足を踏み入れた芭蕉は、奥州の人々と俳諧を通じて交流するにあたっては、古くゆかしい習俗を尊重する心という限定的な意味

を、「風流」の語にことさらに籠めて用いていたと思われる(9)。

「風流の初」を右のように解して、試みに「風流の」句を現代語訳すれば、

「陸奥の、古くゆかしき習俗を大切にする心の起源、『はじめ』とでも言うべきものに触れた思いがしました。こうして田植歌を聞かせていただきまして。」

となる。

実際、芭蕉と曽良のこのときの旅には、陸奥の伝統的習俗への関心が溢れていた。養蚕、かつみを葺くこと、狭布の細布織りと錦木、文字摺り石のしのぶ摺り、十荷の菅菰……。習俗とは異なるが、陸奥の歌枕や古蹟を尋ねて歩く姿勢も習俗への関心に近い。たとえば、須賀川に到着して曽良がまず書き留めたのは、等躬から教えてもらった白河付近の歌枕の情報であった。芭蕉と曽良の旅中の言動から見て、「風流の初」という表現の背景にも、「おく」の古俗への探究意識を認めてよいと思う。

以上のような「風流の」句の解釈は、先行研究の中では赤羽学氏の論考と重なるところが多い。赤羽氏は、「芭蕉は、「風流」を時間的に永続するものと眺めている。殊に芭蕉は、田植歌の素朴な歌声を聞いて、思いを風流の初元に馳せたのである」、「田植と養蚕は、須賀川の風俗のうちで、もっとも芭蕉や曽良の印象に残ったもの」、「「田植歌」に感じた「風流の初」と、「蚕する姿に残る古代哉」とは、風俗の初源に遡った観察として切り離せないものがあり、白河越えが芭蕉を懐旧の世界に誘いこむ機縁となった」と述べている(10)。また、須賀川で作られた二つの三つ物、

旅衣早苗に包食乞ん　（曽良）
わたかの皷あやめ折すな　翁
夏引の手引の青草くりかけて　等躬　〈俳諧書留〉

と（赤羽氏は「わたか」は「いたか」の、「青草」は「青芋」の誤記とする）、

茨やうを又習けりかつみ草　等躬
市の子どもの着たる細布　ソラ
日面に笠をならぶる涼して　翁　〈俳諧書留〉

を挙げて、「ここでも「イタカ」「細布」など、東北特有の風俗に関心を持っている点が注目される。」と貴重な指摘をしている(11)。

二

「風流の初」を前章のように考えた時、はたして芭蕉は、「田植哥」の習俗のどのような点を賞賛したのだろうか。ひいては、これまでに提出された「都ぶりか鄙ぶりか」という議論をどう解決すべきか。この章では、陸奥の田植歌に関する資料を検討して、そうした問題を考えたい。

田植歌の研究はこれまで、中世末の中国地方の山間部に流布していた田植歌を書き留めたという写本『田植草紙』を中心に展開してきている。『日本古典文学大辞典』の「田植草紙」項(12)には、「背景」として田植行事について次のような概説がある。

田植は、田の神を迎えて行われる一種の神事である。中国山地の場合、そうした田植におよそ二つの型があった。一つはふつうの

結による仕事田（大田植）で、もう一つは豪農などが近郷近在の人々を集めて大規模に経営する囃し田（花田植・牛田植）である。囃し田では、篠・笛・大太鼓・小太鼓・鉦の鳴り物を用いて田植を歌い囃し、華麗に飾った数十頭の牛が代を掻く。仕事田でも歌い囃すが、鳴り物は太鼓一つくらいで至って質朴である。また仕事田では栗の枝を水口に挿して田の神の依代とする程度なのに、囃し田では作り物ふうな大ぶりな棚を作って神を祭る。早乙女たちの道行きもあれば、田の畦で踊ることもある。さながら田植を風流行事として営んだ趣である。『田植草紙』のように詞型と組織の整った田植歌は、このような囃し田を背景にして成熟したとみるべきであろう。

芭蕉が聴いた須賀川の田植歌の背景は「仕事田」であろうか、「囃し田」であろうか。「囃し田を背景にして成熟した」らしい「詞型と組織の整った田植歌」である『田植草紙』の田植歌を見ると、

朝の歌一番・朝哥二番・朝うた三ばん・朝うた四ばんの四季
昼哥壱ばん・昼哥二ばん
酒來る時之哥・酒呑うて後
昼哥三ばん・昼哥四ばん
晩哥壱ばん・晩哥二ばん・晩哥三ばん・晩哥四ばん
あがり哥

という構成になっている[13]。そして、これと似た構成を持つ江戸時代中頃の陸奥の田植歌が、本居宣長の『玉勝間』九の巻に記録されている[14]。

みちのくの田うゑ歌

陸奥の田植歌とて、書たるを、人の見せたる、

弥十郎、あすは大たむのおたうゑだが、しつたかしらぬか、太郎次郎、からすの八番鳥に、むく〳〵むつくりと、むくしり起、大くろ小くろ、墨のくろ、上の町の一みなくち、そろりそつと、引こんで、はし〳〵とかくべいぞや、

なへとり、種は千石、おろし申たが、どれが葉広はやわせ、おとりやれや、皆おしなべて、葉広はやわせ、苗の中の鶯は、世をば何とさへづる、蔵枡に十かきそへて、おくら済とさへづる、

朝はか、朝はかの一みなくちに、生たる松は何まつ、白かねの銚子提に、田ぬしいはふ若松、々々の一の枝に、とまる鷹が巣をかけて、巣のうちを見入て見れば、こもち金が九ツ、一ツを宇賀にまゐらせ、八ツの長者といはゝれたよ、けふの田うゑの田ぬし殿には、金の臼が七から、七から八からまして立たは、長者殿にもますべい、杵が十六女が三十三人、三十三人の其中では、どれが目につく旅人、紅の前だれに、上嶋田がめにつく、旅びと、

昼上り、日を見れば、ひるまになり候、昼いひもちのおそさよ、昼いひはいでき候が、椀を何具そろへた、百三具揃へた、昼いひはいでき申たが、おけくさになに〳〵、いそやわかめ苅あげて、たひをまねぶくろから、

曲、鎌倉へのぼる道には、をうなにゝたる石あり、男よりて手だにかくれば、なよれかゝる石あり、かまくらの御所の館は、二階作りの八ツむねに、むねさはしをふせて、二階づくりの八ツむね、鎌倉の御所の屋かたの、百千本の竹の子、百千本がのたつなら、御所は名所となるべい、

夕暮、夕ぐれに出て見れば、前田わせがそよめく、そよめかばお

かりやれや、百や廿余人、百廿余人の其中に、どれがこなたの聟殿、紅の鉢巻に、左鎌が聟殿、
上りはか、上りはかのこんそめには、誰もけんてにかけるな、玉のみこしでむかへ申そ、誰もけんてにかけるな、笠の上で蝉が鳴候、おいとま申ぞ田の神、

これは七つの歌に分けられる。七箇所の改行のはじめの傍線部「弥十郎」「なへとり」「朝はか」「昼上り」「曲」「夕暮」「上りはか」が、それぞれの歌の名である。

渡邊昭五氏は『田植歌謡と儀礼の研究』(15)の第二章「田植歌謡の組織」の中で、「3 みちのくの田うゑ哥」として、これを「組織の一面から中国地方『田植草紙』系のものと比較検討して」いる。それによれば、一日の田植の作業を時間的に追って朝・昼・晩と単純に分けられているという点で両者には類似性が認められるという。ただ、最初の歌「弥十郎」は、東北地方の「小正月の田植踊歌」において馴染み深い名であり、「すなわち一年の始めに際し、祝福の詞を以て収穫を讃えながら村々の農家を巡幸するまれびと神の姿を象った」者の名であると指摘している。また、「詞章の類似する一面もこれまた多い」という。そして、そのように似ている面が多いことについて、渡邊氏は、

要するに、田植歌は構成が大であれ小であれ、また地域がみちのくの果てか、瀬戸内に面する温暖地帯か、を問わず、神霊の約諾を尋ねることなくして行うものは、ついぞこの間まで一つもなかったということであろう。

とまとめている(16)。「みちのくの田うゑ歌」もまた「囃し田」を舞台とした田植歌であったと見てよいだろう。須賀川で芭蕉と曽良が聴いた田植歌が、宣長の記録した「みちのくの田うゑ歌」とまったく同じものであったとは思えないが、共通する構成と呪術性をそなえた歌謡であった可能性は高い。

また、地域的にも時代的にも近い、会津の佐瀬与次右衛門による『会津歌農書』も参考になる。筑波常治著『日本の農書』(17)によれば、元禄二年頃から宝永初年頃に成った、農業のさまざまな知識を約一七〇〇首の和歌に詠んだ農書である。田植歌の歌詞そのものを伝えている資料ではないが、「はじめに」で触れたように横山邦治氏がこれを取り上げており、

○さをとめも心いさまむわけて此
　はやし田植はにぎハしきかな（「（一二）囃田植」項の歌）
○いつしかとさなぶり納め田の神へ
　造酒を備へて祝うれしさ（「（二一）早苗分離祝」項の歌）
○誰が里も大さなぶりや日をゑらび
　村一同は祝ひ来れり（「（二三）大早苗分離」項の歌）

ほかの歌を引いて、芭蕉が「現存する安芸地方の花田植を髣髴させる華麗な田植行事を実見した」と推測している。これも「囃し田」の田植の状況を伝える資料である。

さらに、やや時代は下って文化十年頃に書かれた「奥州白川風俗問状答」にも、田植の風俗についての記事がある。幕臣で和学者だった屋代弘賢は、諸藩の家臣や知人に宛てて「風俗問状」を発送してその答えを求めたが、「奥州白川風俗問状答」は白河藩士の駒井乗邨がそれに答えた文書である(18)。五月の行事について屋代弘賢が「此月田植につき何條の事候哉、さびらきさのぼり等何様候哉、田植歌に古風も候

はゞ可被注下候。」と問うたのに対し、

郡中農家にては、田植入梅之節、田植よしと申日に植初申候、尤其日は小豆飯煮〆等にて祝ひ申候、是をさびらきと唱申候。植仕廻はさなぶりと申て、其日植仕舞の田の水口より苗を三かぶぬき、その跡へ三株うへ替、初にぬきとり候三かぶは家へ持かへり、釜の神其外家内諸神へそなへ、其折もあづき飯煮しめは大根田作いも牛房いかとうふの類を肴にて、親類打寄酒給べ申候、是をさなぶり祝ひと申候。さのぼりさなぶりは通音にておなじ事歟と存候、土俗国風のなまりにてさなぶりと申候事に可有之候、田うへうた、

なひの中のうぐひすは、なにを〳〵とさへづる、くらますにとかきそへてたわらつめ、弥ン十郎とさへづるとうたひ申候。

尤うた数は多く有之趣に御座候へ共、いづれも歌の仕舞は弥ン十郎と留申候、夫ゆへ弥ン十郎ぶしと申候よし、芭蕉の「風流のはじめや奥の田うへ唄」と唫じ候も、此歌を聞て、何となく吟じ出たる事に可有之候。

と答えている。やはり「囃し田」であればこその、御馳走や歌唱に彩られた賑やかな田植のさまだと思われる。これによれば、田植の始まりを「さびらき」と言って祝い、「植仕舞」の日には苗三株を家内の諸神に供えて「さなぶり祝ひ」をするという。曽良の発句「旅衣早苗に包食乞ん」は、家内の神々に苗を供えるという作法にちなんだ句だったのではないかと想像されるところである。また、前引の「みちのくの田うゑ歌」の「弥十郎」と「なへとり」に類する田植歌を紹介してもいる。それを芭蕉の「風流の」句の発想の契機と解説しているのは著名句と歌謡とを短絡させた記事と言うべきながら、「弥ン十郎ぶし」を芭蕉が聴いていったという伝承の存在が思われる。

話題は田植から逸れるがもう一箇所「奥州白川風俗問状答」を引用したい。屋代弘賢からのその次の質問項目は「此月蚕飼につき行事候哉。」というものであった。その答えは、

領主より世話にて、當時は蚕飼を多くいたし候へども、前々は強て専業には不致候故か、行事と申程の事は無之、蚕飼之節鎮守の社家へたのみ、幣を切貫ひ候てこがひの処に立、或は祈念の幣を、鎮守社へ奉納いたし候までの事に相聞候。前に記したるこがひだんごくらいの事にて、外に何も無之候、おなじ奥州にても、安積安達より伊達信夫等の郡々は、蚕飼を専業にいたし候へば、行事も多く有之よしに候。

であった。白河では五月の養蚕の行事は幣を立てたり神社に奉納したりせいぜい「こがひだんご」(19)を作るぐらいのものだが、少し北の地域では「行事も多く有之よし」だと言う。もしかしたら須賀川あたりの行事では「蠶飼する屋に小袖かさなる」(「風流の」歌仙の曽良による挙句)といった光景が見られたのかもしれない。また、曽良の発句「蠶する姿に残る古代哉」はおそらく、須賀川の養蚕の行事を見聞し、何らかの特殊な習俗に触れて詠まれた句であったろう。

ここまで、奥州の田植歌および田植行事に関する記録類を見てきたが、芭蕉と曽良が須賀川で体験した田植行事が「囃し田」のそれであることはほぼ間違いない。つまり、前引『日本古典文学大辞典』「田植草紙」項の「背景」に言う「豪農などが近郷近在の人々を集めて大規模に経営する囃し田」の田植であり、渡邊昭五氏の表現を借りるなら

「神霊の約諾」を得るために、集まった人々に饗応し、飾り立てた牛（東北地方ではむしろ馬が主か）や早乙女を揃え、田植歌はもちろん鳴り物や作り物をも伴いながら田の神を祭る、たいへん賑々しい行事だったと判断してよいだろう。等躬は須賀川の「里正」（漢語としての意味は「里のおさ」）だったと言われ[20]、彼の屋敷跡の広さからしても、俳書刊行の実績からしても、大がかりな田植行事を主宰するだけの地位と財力を持った人物であったことは確かである。

「囃し田」の田植を前提とするならば、「田植哥」の声調や歌詞だけを褒めようとしたというよりも祭としての田植行事の総体を褒めようとしたと見る方が、等躬に対する挨拶句として芭蕉の意識の実際に近いに違いない。言い換えれば、芭蕉は「田植哥」の語によって行事全体を代表させたと考えてよいのではないか。曽良は等躬の主宰する田植行事を「主ノ田植」と呼び「めなれぬことぶき」と書き留めていたが、芭蕉もまたその地方色あふれる「ことぶき」に興味深く接し、神事としての性格も帯びた華やかな田植行事の総体から感銘を受けた。そしてそれを「おく」の伝統ある習俗と認識し、一連の田植行事の象徴として「田植哥」を取り上げて、第一章に述べたような意味で「風流の初や」と表現したものと思う。

右のような解釈に立つとき、本稿「はじめに」で触れた「都ぶりか鄙ぶりか」という問題の答えは、「鄙ぶり」である。「おく」らしい習俗なればこそ、等躬への挨拶に用いたのである。また、その「田植哥」の歌詞が近世調の詞型だったか否かということは主要な問題ではなく、その田植行事が習俗として古い歴史を感じさせるものだったことが重要だったとすべきであろう。

三

さて、元禄二年の旅を『おくのほそ道』に作品化するにあたり、芭蕉は「風流の」句の意味と役割を大きく変えたと思われる。ここからは、その変更の具体的なあり方について、①田植に関する記事を補ったこと、②「風流の」句を陸奥という国全体への挨拶句に転用したこと、③「風流」という語の意味を「俳諧そのもの」または「俳諧としての理想的境地」に変えたこと、の三点にまとめて述べていきたい。

まずは、①田植に関する記事を補ったことについて。

第一章で芭蕉と曽良の行動と句作をたどってきたが、そこで確認できることは、田植行事は須賀川の等躬宅にたどりついて初めて芭蕉や曽良の意識に上ってきた話題であり、白河の関附近ではまだ、早苗に目を留めることはあっても、田植というわざを詠もうとはしていなかったことである。白河の関の直前、芦野においては、

一芦野より白坂へ三リ八丁。芦野町ハヅレ木戸ノ外茶ヤ松本市兵衛前より左ノ方へ切レ、八幡ノ大門通リミゆ。左ノ方ニ遊行柳有。其西ノ四五丁之内ニ愛岩有。其社ノ東ノ方、畑岸ニ玄仍ノ松トテ有。玄仍ノ庵跡ナルノ由。其邊ニ三ツ葉芦沼有。見渡ス内也。八幡ハ所之ウブスナ也。　〈元禄二年日記〉

というように、芦野の木戸の外で「遊行柳」ほかの古跡を見物している[21]が、そこで詠んだ句の記録はない。しかし、芭蕉は『おくのほそ道』には、

又清水流るゝの柳ハ、芦野の里にありて、田の畔に残る　此所の郡守戸部某の、此柳見せばやなど、折〳〵にの給ひきこえ給ふを、

いづくのほどにやと、思ひしを、けふこの柳のかげにこそ、立寄侍つれ

田一枚植て立去ル柳かな

という句文を、芦野での体験として書き加えた。「田一枚」句は『おくのほそ道』が初出である。つまり芭蕉は、須賀川から見て白河の関を挟んで対称的な位置にある芦野に、もう一つの田植の話題を新たに置いた。芦野の遊行柳での田植は優美な能の世界を背景とした田植、白河の関を越えて出会った田植は未知の世界である「おく」の田植、という、内容に変化をつけた田植の反復を企図したと言えよう。

関連して、白河の関を過ぎた折に実際に詠んだ、

早苗にも我色黒き日数哉

も、それを推敲した、

西か東か先早苗にも風の音

も、『おくのほそ道』には採らなかった。この芭蕉句は初案も再案も、

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風のふく

（『古今和歌集』巻第四・秋歌上）

というよみ人しらずのの著名歌に、『袋草紙』に「能因、実は奥州に下向せず。この歌を詠まんが為に窃かに籠居して、奥州に下向の由を風聞と云々」と伝えられる、

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

（『後拾遺和歌集』巻第九・羈旅）

の能因法師の歌の逸話を絡ませた俳諧である。再案形が等躬の編んだ俳書『荵摺（しのぶずり）』に収められたことからすれば、芭蕉の自信作だったはずだ。だが、『おくのほそ道』にとって単なる早苗の景の描写は、田の話題が続くという意味ではくどく、せっかく描き分けた二つの田植にとっては紛らわしいので採らなかったのだろう。なお、田植に関する話題としては少し後にも「早苗とる手もとやむかししのぶ摺」句があるが、句の中心は「しのぶ摺」であり、「早苗とる」は先行する二つの田植の余韻として働いている。

なお、田植を配置した編集の意義については宮脇真彦氏に詳論がある[22]。宮脇氏は、白河の関は「〈都－鄙〉の境界としての場」であり、芦野における柳と田の和歌的構図と、須賀川で披露された陸奥の田植歌とが「好一対をなして配されている」として、そこに意図的に「〈雅－俗〉の大きな落差」が作り出されたことを指摘している。確かに、芦野の条に田植を追加したことにはそうした意図が認められよう。

次に、②「風流の」句を陸奥という国全体への挨拶句に転用したことについて。

第一章で述べたように、本来の「風流の」句は、等躬の家の田植行事に接してその習俗に古き伝統を感じとっての挨拶句だったと思われる。それを『おくのほそ道』では、

すか川の驛に、等窮といふものをたづねて、四五日とゞめらる、先白河の関、いかにこえつるにやと問、長途のくるしみ、身心つかれ、且は、風景に魂うばゝれ懐旧に腸を断て、はかゞしう、おもひめぐらさず

風流の初やおくの田植うた

無下に、こえむもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて、三巻となしぬ

と、白河の関を越えての感慨を詠んだ句とした。「田植うた」を、「等

窮」が主のそれから、主人公が「おく」の道々耳にしたそれに移し替えたのである。こうして、同じ発句が、「おく」すなわち広い陸奥の国全体に対する、主人公からの挨拶句となった。等躬と芭蕉の間に現実にこうしたやりとりがなかったとは言い切れないが、おそらくは芭蕉の創作であろう。この場面の「等窮」の役割については、上野洋三氏が「高度の数寄者」「新天地の関守」と言い(23)、それを受けた宇城由文氏が「風流を解する気骨ある人物との最初の出会いであり、最初の俳諧的試練である」と言う(24)が、いずれも首肯できる。

実際には『おくのほそ道』成稿以前、元禄四年刊『猿蓑』巻之二にすでに、

しら川の関こえて
風流のはじめや奥の田植うた　　芭蕉

という形で「風流の」句が収録されていた。したがって、芭蕉は、右のような挨拶先の変更を、元禄二年の旅からさほど時間を置かずに思いついたと推測できる。

そしてもう一つ、③「風流」という語の意味を「俳諧そのもの」または「俳諧としての理想的境地」に変えたことについて。

『おくのほそ道』における「風流」の意味については、最近、金田房子氏に卓論があった(25)。金田氏によれば、

旅の辛苦の中で和歌以来の伝統的詩心に接したときに、最も理想的な「風流」の境地を知ることができ、俳諧作品として結晶するのであり、『おくのほそ道』で三度用いられる「風流」は、旅にあってこそ感得できる詩心との関わりにおいて、芭蕉が意識的に用いた言葉であったと考えられる。

とのことであり、『おくのほそ道』において「風流」とは「芭蕉にとって理想的境地でもあり、俳諧そのものをも指した」としている。このような金田氏の見解に賛成し、金田氏の所論に多くを負いながら、『おくのほそ道』において「風流の」句で芭蕉が何を表現しようとしたかを私なりに考えたい。

「風流の」句以外の「風流」の二例は、まず、

名取川をわたつて、仙臺に入、あやめふく日也、旅宿をもとめて、四五日逗留ス、爰に畫工加右衛門と云ものあり、聊心あるものと聞て、知る人になる、（中略）猶松嶋、塩がまの、所〳〵畫にかきて送る、且、紺の染緒つけたる、草鞋二足はなむけす、されバこそ、風流のしれもの、爰に至りて其實をあらはす
あやめ草足に結ん草鞋の緒

である。もう一つの例は、

もがみ川、乗らんと、大石田と、云ところに、日和を待、爰に、古き誹諧の、たね、落こぼれて、わすれぬ花の、むかしをしたひ、芦角一聲の、心をやハらげ、此道に、さぐりあしして、新古、ふた道に、ふミまよふと、いへども、道しるべする、人しなければと、わりなき一巻を残しぬ、このたびの風流、爰に、いたれりである。ちなみに、金田氏はこの二例に共通する「爰に至りて」の言い回しについて、「感情を強調する際の成語として用いられており、「爰」は指示語としての働きを持たない」、「感動が極まったときに芭蕉が好んで使う言葉であって、「これこそがまさに！」と訳した方がよいような強い調子を持つ表現であった」と指摘している。この点、「爰」を指示語と見る従来の一般的な解釈は修正されなくてはならない。

右二例の「風流」はどのような意味か。「畫工加右衛門」を評した「風流のしれもの」が「俳諧に狂っている者」という称賛の言葉であることは疑いない。この場合の「風流」は「俳諧そのもの」である。大石田の例は、これも金田氏の文章から引けば「大石田の人々との交流、そして巻いた歌仙、そのすべてについて感極まるほどに素晴らしい風流だった」ということであり、この場合の「風流」は「俳諧としての理想的境地」である。

では「風流の」句の「風流」とは何だろう。それはまず、同じ『おくのほそ道』の中で他の二例と大きく違うとは考えられないから、「俳諧」についてのことであることは疑いない。そして、②で述べたようにこの句が「おく」全体への挨拶とされたならば、「俳諧としての理想的境地」を指しているとするのが妥当だろう。『おくのほそ道』の文脈に即して説明すれば、歌枕である白河の関をどのように越えたかと問われた主人公は、「いにしえの数多の歌人たちのような立派な越え方はできませんでしたが、そのかわり俳諧師の旅にいかにもふさわしく、陸奥でこれから出会うはずの理想的俳諧の最初の経験として、奥の田植歌を耳にしながら越えてきました」と答えたのである。さらには、「……と語れば、脇第三とつゞけて、三巻となしぬ」と続くことからは、「初」には白河の関を越えて初めての俳諧興行という意味も含まれていたと考えられる。「奥の田植うた」を以て、我々が出会って最初の俳諧を始めましょう、という心である。その含みにおいては、「風流」は「俳諧そのもの」の意味になっている。

このように『おくのほそ道』において「風流」の意味を変更して新たに仙台と大石田の二箇所にも配置した一方で、芭蕉は、あったはずの「風流」の語を一つ削除している。〈俳諧書留〉に、

五月乙女にしかた望んしのぶ摺

と書かれていた発句が、『おくのほそ道』では、

早苗とる手もとやむかししのぶ摺

に改められ、当初「風流のむかしにおとろふる事ほいなくて」とあった直前の文は、文字摺り石の状況を述べてから「さもあるべき事にや」とのみの、そっけない表現に短縮された。つまり、文字摺り石の箇所では、かつての「古俗尊重の心」とでも言うべき限定的な意味の「風流」を、慎重に消去したものと思われる。

けれども、逆に、「風流」の語にかつてこめていたであろう概念が、『おくのほそ道』に形を変えて書き込まれている例もある。

其夜、目盲法師の、琵琶をならして、奥上るりと云ものを、かたる、平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる、調子打上て、枕ちかう、かしましけれど、さすがに、邊国の、遺風わすれざるものから、殊勝に、覚らる

かつて「風流」と表現されていた発想を、「邊国の、遺風わすれざる」と言い換えているのである。さきに①として述べた二つの田植に似て、「邊国」の語によってここでも「都ぶり／鄙ぶり」の対立軸を強調していることが見てとれる。

おわりに

『おくのほそ道』は、旅する俳諧師が、旅の苦労や喜びを「風流」第一の価値観に従って語る紀行である。われわれ文学研究の側にいる者

は、元禄二年の芭蕉の旅をつい『おくのほそ道』の語りに沿って読みがちで、旅の現実の諸事情を見落としやすいように思う。

芭蕉と曽良が須賀川にたどり着いた時たまたま等躬の家の田植があった、というふうにこれまで当たり前に理解されてきた。言い換えれば、等躬が主である田植を軽く見てきた。だが、ひょっとしたら実情は違っていたかもしれない。芭蕉は等躬の家の華々しい田植行事のために俳諧師として招かれ日程の調整を図りながら須賀川にやってきた、という可能性はないだろうか。等躬宅に着いてすぐに三吟俳諧を興行し、田植の翌日にも可伸の庵で俳諧を興行したのもみな田植の行事の一部で、それらの俳諧作品は田の神への奉納するためのものだった、という見方ははたして荒唐無稽だろうか。

そのあたりを明らめるためには、俳諧師や連歌師が田植などの神事にどう関わっていたかを、幅広く検討する必要があるだろう。今後の課題として銘記するものである。

注

（1）『日本歌謡の発生と展開』（明治書院、一九七二）所収。

（2）『奥の細道行脚』（溪水社、一九九七）所収。初出は『文教國文学』第二十三号、一九八九年三月。「再攷」とあるのは、同書所収「「おくのほそ道」再見――日光から白河まで㈡――」で当該の句に簡単に触れたことを受けての謂いである。

（3）ＮＨＫライブラリー、一九九七。引用の箇所は120・121頁。

（4）引用は『天理図書館善本叢書　芭蕉紀行文集』（八木書店、一九七二）所収「曽良旅日記」の影印によった。同書解題によれば「曽良旅日記」は〈神名帳抄録〉〈歌枕覚書〉〈元禄二年日記〉〈元禄四年日記〉〈俳諧書留〉〈雑録〉の六つの部分に分けられる。引用に当たっては濁点や句読点を加えた。「より」の合字は開くなど、読みやすい字を用いた。ちなみに、『曽良旅日記』の〈歌枕覚書〉にも、「白河関」の地理的情報が書き込まれている。「下野奥州ノ堺、並テ両国ノ堺ノ明神両社有、前ハ茶屋也。古ノ関ハ東ノ方弐リ半程ニ籏ノ宿ト云有。ソレヨリ壱リ程下野ノ方追分ト云所也。今モ両国ノ堺也。」

（5）その書簡に当たると思われる何云宛芭蕉真蹟書簡を出光美術館が所蔵している。全体が「白河の風雅聞もらしたり、いと残多かりければ、須か川の旅店より申しつかはし侍る。／はせを／関守の宿を水鶏にとはふもの／又白河愚句、色黒きといふ句、乍単より申参候よし。かく申直し候。／西か東か先早苗にも風の音／何云雅丈」という短い文面である。『芭蕉全図譜』（岩波書店、一九九三）の345番。なお、解説編には「何云の添状一通」が引用されている。「予壮年の比、陸（みち）のおく白河に住侍るに、俳諧を翫び、俳名聊そのほとりに鳴りぬ。武府に風雅をかよはして、其道の匠人に消息を取かはしなどし侍る。かの比（ころ）、芭蕉翁桃青のぬしは塵世をのがれ行脚の身となりて、奥羽にくだりたまへる序、予を訪ひたまはんのこゝろざし侍れど、俗事いやしく打過、須ケ川の羈より比消息をなんおくられける。誠につたなきやつがれといへども、その道の芳志浅からざるや、是を文（ふ）ばこの底にして年を経ぬ（以下略）」。

（6）「籏ノ宿ノ下、里程下野ノ方」は「籏ノ宿ノ一、里程下野ノ方」の書き誤りか。

（7）発句としては用いられなかったが、「風流の」歌仙の曽良による挙句に「蠶飼する屋に小袖かさなる」として活かされた。

（8）「物忌」は「田植」の行事の一部だろう。櫻井武次郎氏は『奥の細道行脚『曽良旅日記』を読む』（岩波書店、二〇〇六）において「田植えの行事と関連することであったのを、神道に関心のあった曽良には興味深かったのであろう。」と言う（45頁）。

（9）「風流」の語についての総合的な考察としては、岡崎義恵氏『日本藝術思潮』（岩波書店、一九四三）に「俳諧の風雅と風流」ほか一連の論考がある。また、小西甚一氏に「風流と風狂」（『岩波講座日本文学と仏教第五巻　風狂と数奇』所収、岩波書店、一九九四）がある。なお、「田植」に関する「風

流」の使用例が、貞享三年成立の『初懐紙評註』にある。前句「永禄は金（こがね）乏しく松のかぜ　仙化」に付けられた朱絃句への芭蕉の「評註」に、

近江の田植美濃に恥らむ　　朱絃

只上代の躰也。金乏といふよりむかしを言句也。昔は物毎簡略にして金もとぼしき事、人々言傳へ侍る。近江美濃のちかき所にて田植などの風流も遠き田舎とは違ふべし。

と、「風流」の語が見出せる。「田植などの風流」は、「田植など」の行事を「風流」と言っているとも考えられるが、「田植など」に際しての飾り物の「風流（ふりゅう）」のこととも考えられ、微妙なところである。

(10)　『芭蕉俳諧の精神』（清水弘文堂、一九七〇）第一章第四節「不易流行説」、および、『芭蕉俳諧の精神拾遺』（清水弘文堂、一九九一）第二章第十二節「『奥の細道』にあらわれた東北の風俗」。最初の引用は前者（一九六頁）、続く二つの引用は後者（四三八頁）によった。

(11)　なお、赤羽学氏は、「風流の」歌仙の等躬の脇句「覆盆子（いちご）を折て我まうけ草」について、「覆盆子」が田植行事の飾りであったらしいことを、『虚栗』所収の露草の発句「覆盆子折ル田歌のかざし五月蓑」を挙げて指摘している（『芭蕉俳諧の精神拾遺』四三七頁）。

(12)　『日本古典文学大辞典』第四巻、岩波書店、一九八四。「田植草紙」項の執筆は友久武文氏。

(13)　日本古典文学大系『中世近世歌謡集』（岩波書店、一九五九）所収「田植草紙」翻刻によった。

(14)　日本思想大系『本居宣長』（岩波書店、一九七八）に拠った。ただし、歌ごとに改行した。同書の注によれば、寛政三・四年頃の筆録という。

(15)　三弥井書店、一九七九。

(16)　東北の田植歌の歌詞に関する論考としてはまた、小野恭靖氏の『歌謡文学の心と言の葉』（和泉書院、二〇一六）第1章第13節「田植踊歌の風流」がある。「各地の民俗歌謡の中に、その土地独自の表現を超えた、いわゆる流行表現や流行歌謡の詞章の一部が認められる事実」を論じており、「みちのくの田うゑ歌」中では「弥十郎」と「鎌倉」云々の歌謡に関連する記述がある。

(17)　中公新書、一九八七。56～85頁。歌の引用は注2の横山邦治氏論考によった。

(18)　国立国会図書館蔵『鴬宿雑記』第二百九十八に駒井乗邨（号、鴬宿）の自筆本が収録されており、引用は同館デジタルコレクションの公開画像によった。中山太郎氏による『諸国風俗問状答』（東洋堂、一九四二）に翻刻がある。

(19)　「奥州白川風俗問状答」の二月の神事についての記事に「蚕飼をいたし候ものは、日を撰み鎮守へ團子備へこがひを祈候、又蚕飼済たる時も團子備候、是を蚕飼だんごと称し候。」とある。

(20)　尾形仂氏『おくのほそ道注釈』（角川書店、二〇〇一）128頁によったが、「里正」という表現の出典は不明。諸注においてしばしば「駅長」と言い換えられている。

(21)　「玄仍」は「兼載」の誤り。

(22)　「雅俗の田植――『おくのほそ道』白河の関前後――」（『東横国文学』第三十号、一九九九・三）。

(23)　『芭蕉論』（筑摩書房、一九八六）所収「人物の形象について――『奥の細道』の構成二――」。初出は『女子大文学』第三十一号、一九八〇・三の「『奥の細道』の構成――人物の形象について――」。

(24)　森川昭氏責任編集『論集近世文学4　俳諧史の新しい地平』（勉誠社、一九九二）所収「風流の初――『奥の細道』試論――」。

(25)　「『おくのほそ道』の「風流」――「爰に至りて」との関わりから――」（『東西人文学』第五十号、二〇一五・一二、韓国・啓明大学校・人文科学研究所）、および、「紺の染緒――『おくのほそ道』の「風流」・追考――」（『俳文学報』〈会報　大阪俳文学研究会〉第五十号、二〇一六・一〇）。本稿での引用は後者によった。